

ふるさと見て歩き

第71回

水分神社

◇水分神社とは

高部の東河戸地区には、江戸時代後半に作られた水分神社があります。

水分神社は多くの場合「みくまりじんじや」と読み、水源、分水嶺（分水界となる山の尾根や山脈）を守護し流水の分配を掌る神のことをいいます。今からおよそ一三〇〇年前の奈良時代に編さんされた『延喜式』には、国の水分神として大和国（奈良県）の吉野水分神社など四社が挙げられています。私たちの生活と不可分な水に対して古代の人々は敬意を持って接していたことがわかります。

◇東河戸の水分神社のいわれ

高部の水分神社は「みずわけじんじや」と読み、地元の人々から「水神さん」と呼ばれています。

今から二百年ほど前の十八世紀後半以降、関東、東北地方は天候不順により相次ぐ飢饉に襲われました。特に天明元年（一七八一）から同九年にかけて関東、東北地方を襲った天明の大飢饉では多くの餓死者が出ました。水戸領内でも天明三年から同七年にかけて凶作が続き、深刻な飢饉に陥りました。



▲水分神社

氷之沢の栗田家に伝わる「天明飢饉集草稿」は、この天明の飢饉の状況を伝え、子孫への教訓とするために、飢饉があった天明三年のおよそ四十年後の文政三年（一八二〇）に記されたものです。ここには、天明三年の浅間山噴火で上州（群馬県）周辺での人馬の被害が「幾千万」にも上ったことや、昔から東西金砂神社の大祭礼の前は飢饉になるといつた言い伝えが書かれています。七十二年に一度行われる大祭礼を四年後の天明七年（一七八七）に控え、言い伝えが現実になる不安を感じていたことがわかります。村人が重要な資金源であった格の栽培をやめて、食糧確保のため山に入って蕨や葛を掘ってばかりいること、集めた葛も食べ方を知らないので大半を無駄に



▲天明飢饉集草（栗田勤氏所蔵）

していることなどを歎き、その製法についても記しています。

一方で、この天候不順は大雨による災害ももたらしました。天明六年七月は雨が多く、特に十三日から十七日までの五日間降り続いた雨で、東河戸で山崩れが起き、二軒の家が押し流されました。この土砂で水が堰き止められ「猿畑沼」という沼ができたといわれています（現在はありません）。

この災害後、村の安全と子孫への教訓として建てられたのがこの神社です。大正十年（一九二一）には天明六年の洪水被害の記念碑も建てられました。天明六年から百三十五年が過ぎたこの時期になぜ石碑が建てられたのでしょうか。

奇しくもこの前年の大正九年十月は「国勢調査の大水」といわれ、那珂川・久慈川を始めとし、緒川流域も大氾濫を起こしました。茨城県管

内の死者は九十二人に上り（一説に七十八人）、檜沢・小瀬・野口では死者五十一名を出す未曾有の災害となりました。東河戸の人々は、両親、祖父母から常日頃聞かされてきた江戸時代の災害の様子を次代に伝えるため、石碑を建立したのでしよう。石碑の下部には横書きで右から「山崩止」と刻まれています。山崩れが起きないように、との願いが込められているのです。今でも地元の人々は「いつの時代かわからないが、昔、山崩れで家が二軒埋まって」と江戸時代の災害の話をしてくれます。



▲天清水神社石碑

◇水分神社の祭り

水分神社では、年に一度、八月十六日にお祭りがあります。

東河戸上組の氏子が世話人となり、提灯やお神酒などを準備し、地区の人々がお参りに来ます。猿畑沼が消滅したり、バイパスが造られて神社や石碑の位置が変わったりしましたが、祭りは現在も途絶えることなく続けられています。

歴史民俗資料館大宮館

52-11450